

令和4年度 第3回 太良高等学校 学校運営協議会（学校魅力強化委員会）会議録

「佐賀県立学校における学校運営協議会の運営に関する要綱」第8条第2項に基づき、次のとおり、第3回学校運営協議会（学校魅力強化委員会）の会議録などを公開します。

【期日】 令和4年11月28日（月）15:00～16:30

【場所】 佐賀県立太良高等学校 同窓会館 豊峯会館

【出席者】 学校運営協議会委員 6名（欠席1名）

本校事務局教職員 6名、県職員 1名、アドバイザー 1名

【会議の内容】 以下のとおり。（全体の進行は教頭が行った）

1 開会

2 学校長挨拶

・11月22日に開催された本校主催の通級指導研究発表会について

県内外の教職員100人以上の参加があった。会の前半は本校教諭による発表、後半は滋慶医療科学大学大学院准教授の岡耕平先生の講演があった。出席者からは非常に反響があり、当日配ったアンケートにもびっしりと感想を記載してあるものが多かった。

岡先生からも本校の教育体制について「当たり前になっていることのレベルが高すぎて驚いた」との感想をいただいた。会の昼休みを利用して、ロビーでは生徒と地元の事業所が連携して特産品の試食販売を行った。こちらも完売が続出する盛況ぶりで生徒も事業者も楽しんでいる様子で大変充実した会になった。

・部活動、諸大会での結果報告

弓道部の本校2年男子が、県大会で2位になり全国大会に出場することになった。団体戦では惜しくも4位になったが健闘した。また、パソコン部も九州大会出場が決まった。

・学校運営について

少子化が進行する中、令和5年度から学区が廃止され全県一区となる。太良高校においてはJRの非電化による乗り換えで、不便さを感じる生徒が半数以上を占めていることがこの度実施したアンケートで分かった。学校運営は最も厳しい状況を迎えていると感じる。学校運営協議会を通して学校と地域の連携を深め、太良高校にとって明るい未来を想起できるように取り組む必要がある。

3 部会長挨拶

部活動の活躍について、少ない生徒数の中でこれだけの実績を残すことができるととても誇らしく思った。これからも太良高校の発展のためにみんなで協力していきたい。

4 委員等の紹介

出席者（委員 5 名、本校事務局教職員 6 名）、高校魅力化アドバイザー、県の教育振興課の 1 名がそれぞれ自己紹介を行った。

5 太良高校における SAGA コラボレーション・スクール (SCS) について

(1) SCS 全般と評価部会について

① 山口 SCS コーディネーターより

令和 4 年度に始まった県の事業「唯一無二の誇り高い学校づくりプロジェクト」における SAGA コラボレーション・スクールについて資料 2 の P.1～2 に基づいて説明した。

このプロジェクトは、中学生が通いたい、保護者が通わせたいと思うような魅力的な高校づくりを目指す取り組みで、本校は地域と連携した学校運営により高校の魅力を高める「SAGA コラボレーション・スクール (SCS)」の重点校に指定された。重点校は県内で 4 校（太良高、白石高、牛津高、有田工業高）。重点校には高校魅力化コーディネーターが配属された。

② 事務局より（教頭より説明）

事前配布資料の 1-1～1-5 を基に説明した。

太良高校がかかげるグランドデザインの中央にある軸を基に、学校側と地域側とがそれぞれが軸に働きかけながら学校運営を行っていくことを確認した。また、学校課題＝地域課題として相互関係にあることから、コミュニティ・スクール開催の意義を説明した。

本校の年間を通した学校運営協議会においては、5 月の全体会（PLAN）、7 月の学校評価部会（PLAN）、9 月の地域連携部会（DO）、12 月の学校評価部会（CHECK）、2 月の地域連携部会（ACTION）、3 月の全体会（ACTION）という PDCA サイクルの仕組みを解説、確認した。

(2) 9 月 1 日（木）開催の地域連携部会の概略について（主幹教諭より説明）

令和 3 年度の「体験学習」についての受け入れ先、内容などについてスライドを用いた解説をした。体験学習については、授業日が決まっていることから受け入れ先を見つけるのに苦労していると、それに対し商工会が協力を検討するとした。

地域連携活動の「オレンジカフェ」がサガテレビで取り上げられた。

生きがい助け合いサミットで「ご縁クラブ」の活動について発表があった。

太良町観光協会から JR の観光列車「ふたつ星」が多良駅に停車する際、生徒が地域と連携して何かできないかと打診があった。

以上の旨を報告をした。

6 意見交換（議長 同窓会長）

(1) 教育活動について（教頭より説明）

委員には学校要覧を配布し、生徒の出身地域や部活動、進路状況の説明を行った。

(2) 学校評価（中間評価）について（教頭より説明）

上記について結果報告を行った。特に B 評価に該当した4項目については詳細を説明した。

項目①学力向上の＜多様な評価方法に対応できる指導方法の研究実践＞について、取り組んだと回答した教員は 100%、「授業が分かりやすく、指導も熱心だと思う」と回答した生徒も 88%であったが、新教育課程における評価や授業改善をさらに進めていく必要があるとして B 評価となった。

項目②心の教育の＜生徒が、自他の声明を尊重する心、他社への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など豊かな心を身に付ける教育活動＞では詳細な分析評価においては全体的に高いものの、心の教育の主な担当である教諭個々の評価で B 評価が多数を占めたことからこの評価になった。

項目③健康・体づくりの＜望ましい生活習慣の形成、望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成＞は B 評価だった。これは、学校側は朝食アンケートの実施や外部講師を招いての健康教育の充実を図ったが、6月実施のアンケートで朝食を全く摂らない生徒が 10%程度いることが判明したことから、さらに啓発を進める必要があるとしてこの評価となった。

項目④業務改善・教職員の働き方改革の推進の＜業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減＞では、管理職が積極的に年休の取得、定時退勤の推奨を行っているものの目標に及ばない状況にあることから B 評価となった。

【意見交換】

(委員 1) 項目③について

小、中学校と過ごしてきた生活習慣の中で身に付けてきたものなのでこれから変化させていくのは難しいのではないかと感じる。さらに全学区で遠方より通学してきている生徒にとっては朝食を摂ることがより難しいように感じる。おにぎり持参で、汁物だけでも学校側が提供できる体制を築いてはどうか。

(3) 学校運営協議会について

① 山口 SCS コーディネーターより

資料 2 の P.3~P.5、高校魅力化評価システムの結果表を基に説明した。

高校魅力化評価システムの結果を分析し、高校における良い面と課題とする面をそれぞれ指摘、現在の太良高校においては「生徒が挑戦できる環境は整っており、生徒自身も意欲はあるが挑戦する機会が少ない」とする考えを説明した。また、教職員を対象とした調査結果では、生徒と地域との連携が十分にできているとの認識を示しているが、生徒たちにはその考えは浸透しておらず、生徒と教職員に認識の隔たりがあるのではないかとこの旨も説明した。

高校魅力化に向けては、生徒や地域の方たちを交えた活発な議論を展開することである程度の目標期限を定めたビジョンを設定することが急務とし、そのためにも早急に熟議の場を設けるよう求めた。また、11月時点で遂行しているコーディネーター業務の報告と、

持続可能な連携システムの構築に向けて、今後展開していきたいと考えているコーディネーター業務についての解説も行った。

② グループ熟議について（教頭より説明）

資料1のP.5を基に説明した。

地域の多様な人材、本校の生徒、教職員を交えて様々なことに意見を出し合い、取り組みを生み出していくことを提案した。

例として、現在、某事業所主導のもと、多良岳に案内板を設置することに関して議論の場が設けられていることや、度重なる会議を経て開催するに至った地域連携事業を紹介した。

一方で、大人主導で企画運営しがちなため、どうしても生徒の「やらされてる感」がぬぐい切れない現実を指摘。今後は生徒、教職員など多様な人材を交えた現場レベルでの議論の場を設定し、「やらされている感」を解消していくことも重要と考えているとした。

③ 今後の日程について（主幹教諭より説明）

- ・令和5年2月20日（月）15:00~16:30に学校評価部会を開催する。

学校評価の承認、次年度の評価部会計画、次年度教育目標・教育活動について議論する。

- ・令和5年3月2日（木）15:00~16:30に全体会を開催する。

学校評価の承認、次年度の地域連携部会・学校評価部会の計画、次年度教育目標、教育活動、年間計画などの承認について話し合う。

④ 全体を通して（意見交換）

委員1：部活動、特にスポーツで町の小中学生をよんで、高校生が子供たちに指導するようなイベントを開いてみてはどうか。そうすることで、地域連携の希薄さの解消にもつながるのでは。

7 指導助言

- ・佐賀県教育庁教育振興課指導主事 大島恒平氏

今日までに課題や提案として挙げたことをブラッシュアップして、協働につなげてほしいと思う。

- ・佐賀県高校魅力化アドバイザー 門脇享平氏

学校評価にあった朝食の問題で委員より提案があった。部活動の地域貢献の提案も同様。言葉にすることで、解決の糸口が少し見えると思う。互いに「できるところはどこだろう」という探りがまさに協働につながる。

8 閉会